報告

地域社会に学ぶ体験型学習
～第７回国際珍島学会と韓国の地域から学ぶことの意義～

大橋　眞[1)2)]・光永雅子[2)]・中恵真理子[2)]・齊藤隆仁[1)2)]
[1)] 徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部、[2)] 全学共通教育センター

概要：大学における国際交流がさかんになってきたが、地域に学ぶことを目的とした大学間国際交流は、地域学の意義を考える上で大きな意味がある。今回韓国南部の珍島で開催された第７回国際珍島学会に参加して、韓国の珍島で活躍する地域社会人との交流の中から、地域に学ぶことの意義についての考察を行った。学会は主として珍島の地域社会人と韓国と日本の大学生の体験型学習の場として設定されており、様々な文化的背景を持った学生がお互いを知ると同時に、共に珍島という地域社会から学ぶ場という位置付けになっている。昨年に引き続き今年度のテーマは「葬礼」で、世界各国の葬礼文化を知ると同時に、韓国、日本を中心として世界の７カ国の学生と研究者が議論しながら地域学の意義についてお互いに学び合った。
（キーワード：地域、体験型学習、韓国）

A practical training in the society of community
-A educational significance of participation in 7 th International congress on Chindo island and a regional community in Korea-

Makoto OHASHI, Masako MITSUNAGA, Mariko NAKAE, Takahito SAITO,
(Institute of Socio-Arts and Sciences, The University of Tokushima)

(Key words: community, practical training, Korea)

１．はじめに

国際社会のグローバル化の進展と共に、地域の役割が大きくなり、地域独自の文化についての意義を見いだすことも地域の課題となりつつある。この様な時代背景のもとで、地域の大学の貢献が重要な意味を持つようになってきた。

地域文化の意義に関して、多くの研究がなされてきたが、近接する国同士での国際協力による地域文化研究を行うことにより、時代をさかのぼって文化の由来についての研究が進展することが期待される。このような研究を進展させるために次世代の育成を欠かすことはできない。そのために、地域に学ぶという視点を持たせるための、体験型学習は大きな意義があると考えられる。

今回韓国南部珍島で開催された国際珍島学会に参加し、同地域で活躍する地域社会人との交流の中から、地域に学ぶことの意義について学ぶ機会を持つことが出来た。この学会は、ソウル大学のチョン・ギョンス教授（文化人類学）の主催で、韓国南西部の珍島において毎年開催されているもので、今年で７回目を迎えた。珍島は、現在は本土と橋で結ばれているが、朝鮮王朝の時代から流刑の島として利用されてきたこともあり、韓国の中でも古い習慣が残されており、韓国の文化を研究する貴重な場となっている。地域から学ぶという趣旨や学生、教員が地域社会人と体験を共にする活動は、徳島大学の質の高い大学教育改革プログラム「地域社会人を活用した教養教育」[1)2)]と関連がある。ここでは、学会で得られた成果を中心として、地域に学ぶことの意義について考察する。

２．国際珍島学会シンポジウム

平成 21 年 10 月 31 日―11 月 2 日にソウル大学（会長　チョン・ギョンス教授）の主催で、ソウル女子大学、山口県立大学、徳島大学から合計 42 名の学生が参加して、珍島の郷土文化センターでシンポジウムが行われた（表１）。テーマは世界各国の葬礼文化であり、韓国、アイヌ民族、台湾先住民族、マレーシア、ドイツの事例を中心

表１．第７回国際珍島学会のプログラム

シンポジウム「葬礼文化を考える」	
14:30-15:00	盂蘭盆会の由来と伝承様相の研究
15:00-15:30	台湾原住民の死の概念
15:30-16:00	日本のアイヌ民族の死の儀礼
16:00-16:30	マレーシアの死の儀礼
16:30-17:00	ドイツ人の死の儀礼
17:00-17:30	大統領の葬礼式
17:45-19:00	総合フォーラム
19:00-21:00	懇親会

として韓国、日本、カナダ、ドイツの研究者による講演がおこなわれた（図１）。また、ソウル大学から、日本の盆の行事に関する研究報告があった。その後、全体討論が行われた。世界的に見ても盆の行事は、日本でもっともよく保存されていることについて、地形的など様々な要因が関係していることが指摘された。

３．珍島の文化体験

シンポジウムに引き続き、珍島の地域社会人による模擬葬礼が行われた。伝統文化の継承で活躍している地域社会人が参加して、地域に残る葬礼に由来する音楽と舞踏を披露した。その後で、日本の石垣島から参加した地域社会人が、死者の役を演じて、葬礼の再現が行われた。一般的に葬礼ということに対してタブー視する傾向のある日本とは異なり、葬礼を観光の目玉にしていることに対しては少し異なった文化的背景を感じる。しかし、この違いはなぜ起こってきたのかについての考察も必要である。

長い歴史のある珍島には、様々な史跡が残されている。とりわけ日本との関係が深いのは、豊臣秀吉の韓国出兵に関わる史跡で、珍島には数多くの日本兵の墓が残されている。小西行長の部隊がこの地域に侵攻したことから、今治出身の兵がここに埋葬されているそうである。水軍の兵であり同じ海の仲間ということで、地域の人により一人一人の土塁状の墓が大切に守られていた。この地を侵攻して、この地で土になった日本兵の墓に対して、日本と韓国の学生が共に祈る光景は、これまで、単に教科書的な知識でしかなかった豊臣時代の光景を身近に感じさせるものになった。また、このような体験を通じて国境を越えた形で、共に地域に学ぶことにより、これからの国と国との関係を改めて考えさせられるきっかけになったと思われる。

４．地域に学ぶということ

ソウル大学のチョン・ギョンス教授が、文化人類学の講義で「フィールド調査という言葉はつかうべきではない」ということを繰り返し注意された。「地域は調査の対象ではなく、地域は自分たちを学ばせてくれる先生のような存在として考えるべきだ」という考え方に基づく。この考え方は、山口県立大学の現代ＧＰにおける「地域が学校、地元が先生」というキャッチフレーズと相通じるものがある。徳島大学総合科学部の現代ＧＰも地域の文化遺産を教材として活用しながら、地域に学ぶことを体験する授業を行った[3)]。また、徳島大学全学共通教育のＧＰ取り組みである地域社会人を活用した教養教育「地域に広がる知の循環型社会を目指して」においても、地元の地域社会人から何を学ぶかというところが、この取り組みの要となっている[1)、2)]。地域を研究対象として利用するのではなく、地域の人からいかに学ぶかという思考の過程のなかで、学ぶことの意味を考え、学ぶことの方法論を自ら創造し、自ら学ぶ姿勢を育てることにある。お互いにこのような考え方が出来れば、異なった文化的背景を持った人同士の交流は、その過程を通じて自ら学ぶことが出来る機会になる。相手の視点から見ると、これまで自分から気づかなかった点が明確に浮き彫りになり、その相手の視点に立って物事を見ることの考え方が、自分の再発見に繋がるという訳である。これまで自分自身の中に自然と築かれていた常識に基づいて、被対象物に対して判断することが、知識を基にした考え方の標準として蓄積され、物事を考えるときに機能してきたはずである。このようにして、自分の考え方には閉鎖的な壁が自然と築かれることになる。このように異文化交流の真の意義は相手を知ることではなく、相手の視点から

自分を見て、これまでの常識を考え直す機会が与えられることにある。相手を知るだけでは、知識が一つ増えたにとどまるが、自らを考え直すことの重要性を知ることにより、様々な視点を持つことが出来る土台が出来る。このような基本形が出来るためには、地域を研究の素材ではなく、地域から何が学べるかという積極的に自らの考え方を見直そうとする態度が必要になってくる。チョン・ギョンス教授の言葉は、「学習者には学ぶことの意義を自ら考えることがます第一に必要である」という意味に捉えることが出来るように思われる。地域を調査することにより研究の素材をえるという考え方では、自らの考え方を、問い直そうということにますます遠ざかるかも知れない。あるいは、このような失敗を経験しないと本当の意味は理解するのが難しいという意味もあるように思われる。

５．地域社会人の生涯学習

珍島はこれまで韓国の中でも独特の文化を持った地域社会として認識されてきたが、この地域社会で先祖代々守ってきた伝統文化が、大学との共同研究という形で、その価値が見直された。その結果として、特色のある葬礼文化は韓国の研究者だけではなく、一般の人からも注目されるようになった。また、この地域で毎年開かれる国際会議の成果もあり、一部の海外の研究者や一般人からも価値の高いものとして、評価されるようになった。このような経緯を踏まえて、地域住民の中に自らの文化を見直すことに対する動機付けができた。また、地域住民同士のつながりに関しても、新たな認識がされるようになった。韓国の歴史的背景の中での珍島文化の位置づけを模索するようになった。その中から、伝統文化をさらに発展さ

図１．珍島での国際珍島学会

Ａ：シンポジウム「葬礼文化を考える」
Ｂ：シンポジウムに参加したソウル大学、ソウル女子大学、山口県立大学の学生
Ｃ：韓国の大統領の葬礼式に関する発表　　Ｄ：地域社会人による葬礼文化を基にした舞踏
Ｅ：台湾原住民の死の概念について　　Ｆ：葬列の踊りがやがて踊りの輪に発展

せた創作作品が生まれ、観光客を呼び寄せるアイテムに成長した。このような特色のある伝統文化が、観光産業を生み出して地域に新しい雇用を創出し、観光産業が過疎の村の活性化に貢献することになった。珍島の特色として、単に観光産業が成長したのではなく、地域の人達が自らの継承してきた伝統文化を発展させる過程で、自らの伝統文化を学び直す自己学習が、その発展の引き金となったという点である。自らが学習素材の提供者であると共に自ら学習者になっている点が、継続的な自己学習を可能としていると思われる。また、韓国半島のように、珍島と文化的背景が近い他の地域文化と比較することにより、他者の視点から自らの文化を見直す事が可能となり、その価値に対しての客観的な基準という指標を持ち得たことが、高いモチベーションを持ちながら持続的発展を可能にさせたという可能性もある。さらにこのような自らの文化の創造的発展を可能としているのは、その素材に特色がある点が重要である。韓国の他の地域と比較して、先祖代々守ってきた伝統文化がよく保存されていることが、自分たちの先祖の功績を自ら認識し、文化の継承者の流れの中に自らの存在を位置付けることにより、自らのアイデンティティを再認識させるために、持続的な発展を可能としていると思われる。さらに自分の文化を知ることは、他の文化を知るところから始まることを、この珍島の地域社会が、生涯教育の場として主体的に機能している点も重要である。また一方では、すでに伝統文化の形が失われつつも、何らかの形で類似の伝統文化を持っている地域の人達にとって、珍島の伝統文化を知ることにより、消えかけていたお互いの伝統文化の繋がりを認識し、この観点からその地域の伝統文化の継承の重要性を再認識させる効果があると思われる。

６．珍島の伝統文化の発展を可能としている要因について

珍島の生涯学習の重要なテーマである自らの伝統文化の継承とその持続的発展が挙げられる。珍島の伝統文化の中心になっているのが葬礼文化である。葬礼文化は、慣例が重視されるために、世代を超えて継承されやすい文化であるが、近年のように業者に委ねる風潮が続くと、その本来の意義に関しての継承性に問題が出てくる可能性が高い。したがって、継承性が高いのは近年以前の現象としておく方が妥当かも知れない。韓国では、政権の変革が繰り返されて、文化の継承に問題があった。珍島は、そのような政権の変革の影響が及びにくいという地形的な特色があると思われる。このような伝統を持つ珍島の伝統文化であるが、近年になってその価値が見直され他地域から注目されるようになってからも、自らの創意工夫でこれまでの伝統を生かしながら、さらに発展させているとことにある。このようなことを可能としている要因として、自らの文化は自分たちで継承して発展させていくものであるという自負心が高いことがある。この地域の葬礼文化は、大きな宗教組織に組み入れられることなく世代を超えて受け継がれてきたと考えられる。

７．地域文化のつながり

今回の珍島学会で葬礼に関する各国の実例が紹介されたが、珍島の葬礼は、台湾の原住民の葬礼と多くの共通点が見られた。葬式は、肉体としての現世の人との別れではあるが、霊にとって新しい出発の儀式であるという点である。台湾では、輪廻の思想に基づき再び人間としてこの世に戻ってくることに重点が置かれているが、葬式がその節目のお祭りであることには変わりがない。そのために、どちらの例を見ても、日本式の葬式を見慣れた日本人から見ると、めでたいお祭りのように見えるという特色がある。珍島の場合には、棺の周りで泣く知人の存在が極めて需要であり、台湾の場合は泣く人が雇われることがあるという。このような、現世の人との別れという場面を演じるために、亡くなった人に対する惜別の場面が必要と考えられる。このような過程を経て、出棺の時から状況は変わり、お祭りのようなにぎやかな場面が始まる。珍島の場合には、葬列のカネと太鼓の拍子が次第に早くなり、葬列の前を歩く人の踊りが次第に熱を帯びてくる。手高く上げ、摺り足で交互にのびのびと踊る様は、阿波踊りと見間違うほどよく似ている。霊の出発のお祝いという

点から、日本の祝い事としてのお祭りと似たような場面になるのではないだろうか？また、台湾の原住民の伝統的な葬礼の例では、葬列は出荷のあとで、爆竹がなり、派手に仕立てられた霊柩車が、お祭りのパレードのように進行し、参列者には盛り籠の菓子が振る舞われる。このように日本と近接し、文化を共有する部分が多い国における葬礼文化を見てみることにより、日本の葬礼文化の遍歴を考えさせられることになる。江戸時代の初期の檀家制度により、仏教が日本に入り込む前は、日本でも葬礼がこのように霊の出発のお祝いであるという位置付けがされていた時代があるのではないかということである。仏教が檀家制度により各家に入り込んでから、霊の扱いをお祝いとするわけにはいかなくなり、この部分は曖昧な形で残ることになった。事実今の日本の仏式という形式の葬式では、霊の部分を公に扱うことができないので、直接この部分に言及することも少ない。しかし現実的には、お盆や、法事などにおいて、暗黙のうちに仏壇に手を合わせながら霊の存在を感じることや、墓参りなどをするときに故人の霊の存在を感じることもある。葬式から霊の出発の儀式という面を曖昧にしたことから、霊は家を出てもしばしば戻ってくる存在として人々の心の中に定着した。仏教本来の考え方というより、古代のアミニズムに近い考え方であることにも、あまり気に留めることもなく、先祖のやり方を継承するようになったのが、日本の葬礼ではないかと思われる。このように何事もなければ、普段気にかけるようなことでもない日本の葬礼文化を考えるきっかけは、このような異文化との出会いである。

８．異文化を知るということの意義

それは、これまで何気なく行っていた行為の意味を他者からの視点で考え直してみることに他ならない。それぞれの行為の意味は、それだけを考えて見ても答えを見いだせるわけではない。葬礼のように行為そのものは、代々伝わっていた方式で行われることが多い。儀式は、その行為をこれまでのやり方に則ってやることに、意義があると考えられる傾向が強い。しかしその行為の意味まで、代を重ねるにつれて正確に伝承されてきたかについては知るすべもなく、後世になって新たな意味づけが行われた可能性もある。異文化を知ることは、自分の文化と比較することにより、対象となる文化の位置付けを考えることと関係が深いが、本当のところは自分たちの文化も、また他の多くの文化と同様に比較の対象となるべきものであるということである。その意味では、これまでの自分たちの文化を基準にして他の文化を比較して見ることで、異文化を知ったつもりになっていたが、それでは本当に異文化を知ったことにならないことに気がつく。少なくとも対象とする文化の視点から見て自分たちの文化を考えることが必要となる。同様のことは、自分の専門分野以外の学問に接したときの考え方にも繋がるが、自分の専門としている学問で自分の基準を考え直すことは、このような何気なく接している文化の問題以上に難しい問題となる。そのために、異文化を知ることを常に心がけることで、自分の文化を考え直すことに気がつき、自分の専門とする分野で基準となっている考え方も、もう一度見直す必要があることに対する心がけを持つことに繋がっていくと考えられる。

９．おわりに

地域社会の文化を知ることにより、これまで自分たちが常識と考えていたものは、あくまで自分の属している文化の常識であり、それを基準として他の文化を見ることだけでは不十分ということがわかる。このような考え方は、地域社会人から何を学ぶかということであり、相手側の視点に立って物事を見つめ直すことでもある。そのような相手の考え方を直接的に知ることは難しいために、相手側の視点に立つことは、想像力を必要とする。やがては、多くの視点を持つことに繋がっていく。そのために、「地域を知る」ことは、学際的な学問分野や、教養を深める上で極めて重要なことと考えられる。

謝辞

今回の珍島学会のお世話をいただいたソウル大学のチョン・ギョンス教授、崔助教に感謝します。また、珍島の地域社会の方々および学会に参加さ

れていた各国の教員、学生の方々には大変お世話になりました。記してここに感謝します。

引用文献

１）光永雅子、中恵真理子、Steve T. Fukuda、斎藤隆仁、金成香奈子、的場一将、大橋　眞（2009）学生・職員・教員参加型の教養教育ＦＤ活動－ＵＤ（University Development）活動としての意義、大学教育研究ジャーナル 6:98-102

２）大橋　眞、中恵真理子、光永雅子、Steve T. FUKUDA、斎藤隆仁、菊池　淳、香川順子、廣渡修一（2009）「大学教育改革と教養教育-地域社会人活用による知の循環型社会構築に向けて」、大学教育研究ジャーナル　6:88-97

３）大橋 眞・山城考・中鉢龍一郎・佐藤征弥・佐藤高則　(2008) 体験型ゼミ『徳島の文化遺産「吉野川第十堰」から学ぶ自然と人間の共生』の実施と共生環境教育としての意義、大学教育研究ジャーナル 5：128-132